慶祝 辻会長らに叙勲

二〇〇五年秋の叙勲・褒章等で塚本隆久（昭29卒）、辻兵吉（昭19卒）、佐藤時幹（昭17卒）、信太敏彦（昭29卒）、菅原脩二（昭22卒）、矢野浩（昭26卒）、佐々木毅（昭36卒）、井上隆明（昭25卒）、中村正（昭17卒）の各氏が受章（賞）されました。心からお祝い申し上げます。

☆瑞宝重光章

塚本隆久氏（昭和29卒）農林水産行政事務功労。元林野庁長官。

☆旭日中綬章

辻　兵吉氏（昭和19卒）産業振興功労。昭和六十一年から通算十五年間、秋田商工会議所会頭。平成十五年から秋田高校同窓会会長。

☆旭日小綬章

佐藤時幹氏（昭和17卒）地方自治功労。元阿仁町議会議員、同議長。

☆瑞宝双光章

信太敏彦氏（昭和29卒）郵政事業功労。元金岡郵便局長。

菅原脩二氏（昭和22卒）学校保健功労。能代市内の小中高校の学校医を長く務める。

矢野　浩氏（昭和26卒）教育功労。能代一、東雲、八森中学校長などを歴任。

☆紫綬褒章

佐々木毅氏（昭和36卒）政治学・政治思想史研究功績。東京大学法学部教授、学部長を経て平成十三年から同大学長を四年間。現学習院大法学部教授。

☆地域文化功労者

井上隆明氏（昭和25卒）元秋田経法大学長、文芸評論家。

☆学校保健・文部科学大臣表彰

中村　正氏（昭和17卒）元秋田北高等学校・学校歯科医。

新春随想

人口減は千載一遇の好機

西木　正明
（作家・昭和34年卒）

明けましておめでとうございます。二十一世紀に入って早くも六年目の新春を迎えました。この間、世界はますます混迷の度合いを深め、私たちの前途も視界不良です。

そうした不安材料の中で、秋田のみならず日本全体の焦眉の問題は、やはり少子化による人口減少と、社会全体の高齢化であろうと思います。政府などの予測では、百年後日本の人口はほぼ半減するといわれています。

現在の人口はおよそ一億二千万人余りですから、二一〇〇年代のはじめのわが国の人口は、約六千万人前後ということになります。問題は、この数字をどう受け止めるかです。

過去の統計によると、六千万人という数字は今から七十七年前の一九二九年、すなわち昭和四年ごろの日本の総人口に匹敵するそうです。つまり、わたしたちはそれだけの年月を費やして増やした人口を、およそ百年かけて元に戻そうとしていることになります。

昭和初期といえば、日本の社会が農業や軽工業を中心とする時代から、重工業型への転換をめざしつつつつある時期で、その軋轢がもたらす激烈な不況に陥っていた時期です。折しもアメリカ発の大恐慌の影響をもろに受け、日本国内での生活に見切りをつけた人々が、満州をはじめとする大陸に、大挙して出て行った時期でもありました。

時代の大転換期という意味では、この十数年はまさにそうだったと思います。昭和初期との違いは、当時は有り余る人口を養いきれず、大陸とまいますと、昭和初期当時の人口に戻るということは、国土面積がほぼ同じのイギリスやフランスの現状に近づくということです。

良くご存じのように、英仏両国は、経済規模では日本に及ばないものの、国家としての存在感は日本に勝るとも劣らず、とりわけ国際的な発言力は彼らの方が勝っているといわざるをえません。そしてこれらの国で暮らす人々の間から、自らの人口について、少なすぎるというような嘆きや不満が聞こえてきたことはないように思います。

これらヨーロッパの老大国の有り様は、まさに日本のこれからのヒントになるのではないでしょうか。人口減少にいう新天地に望みをつないだのに対し、現在は逆に人口減少への対策に四苦八苦しているという点にあります。

私は、もしかしてこれは日本という国、あるいは秋田という地域社会にとって、千載一遇のチャンスではないかと思っています。具体的にいいより、ひとりあたりの空間や面積は当然ながら広くなります。それを最大限活用した社会や産業を創造し、のびのびかつゆったりとした生き方が出来る国や地域の出現に備えるべき時期が近づいているのではないかと思うのです。

あの終戦直後、大陸や南方からの引揚げ者を加えても、日本の総人口は八千万人ほどでした。現在の三分の二ほどの人口で日本人は戦後の混乱期を乗り切り、後に世界第二の経済大国となるための基盤作りを行ったのです。

このように考えれば、人口減少もあながち悪いことばかりではないと思えてきませんか。ひとりあたりの生産性を上げれば、それはメリットにもなりうると私は思います。

ともあれ、新しい年が、皆様にとってよりよい年でありますように。